

行列の標準形に関するトピックス

氷上優希 (coolplus099)

2014年11月4日

A を n 次正方行列, V を \mathbb{C}^n 上のベクトル空間とする.

■ **行列の対角化** $\lambda_1, \lambda_2, \dots, \lambda_s$ を A の固有値とする. 固有値 λ_i に対する固有空間 $W(\lambda_i)$ を

$$W(\lambda_i) = \text{Ker}(A - \lambda_i E) = \{v \in V \mid (A - \lambda_i E)v = 0\}$$

で定める. また, t に関する多項式 $f(t) = \det(tE - A)$ を A の 固有多項式 という.

$$f(t) = (t - \lambda_1)^{m_1} (t - \lambda_2)^{m_2} \dots (t - \lambda_s)^{m_s}$$

ならば $m_i = \dim W(\lambda_i)$ である. $\dim W(\lambda_i) = n - \text{rank}(A - \lambda_i E)$ が成り立つ.

固有値 λ_i に対する一般固有空間 $\tilde{W}(\lambda_i)$ を

$$\tilde{W}(\lambda_i) = \bigcup_{l=1}^{\infty} \text{Ker}(A - \lambda_i E)^l = \{v \in V \mid \exists l \geq 1 \text{ s.t. } (A - \lambda_i E)^l v = 0\}$$

で定める. 一般に $W(\lambda_i) \subset \tilde{W}(\lambda_i)$ であり, $\mathbb{C}^n = \bigoplus_{i=1}^s \tilde{W}(\lambda_i)$ が成り立つ.

等式

$$\text{rank}(A - \lambda_i E)^l = n - \dim W(\lambda_i)$$

をみたす最小の自然数 l を l_i とかく. A の最小多項式を $\varphi(t)$ とすると,

$$\varphi(t) = (t - \lambda_1)^{l_1} (t - \lambda_2)^{l_2} \dots (t - \lambda_s)^{l_s}$$

が成り立つ.

行列 A が対角化可能であること次の4条件は同値である.

- (1) 固有値 λ_i の固有ベクトルを u_i とすると, 行列 $P = [u_1 \ u_2 \ \dots \ u_n]$ は正則である.
- (2) 各 i に対して $\dim W(\lambda_i) = \dim \tilde{W}(\lambda_i)$ が成り立つ.
- (3) $\mathbb{C}^n = \bigoplus_{i=1}^s W(\lambda_i)$ が成り立つ.
- (4) A の最小多項式には重根をもたない.

特に, A の固有多項式が重根をもたなければ A は対角化可能である.

■ Jordan 標準形 固有値 λ_i のサイズ k_j の Jordan 細胞 とは, k_j 次正方行列

$$J(\lambda_i, k_j) = \begin{pmatrix} \lambda_i & 1 & 0 & & 0 & 0 \\ 0 & \lambda_i & 1 & & 0 & 0 \\ 0 & 0 & \lambda_i & & 0 & 0 \\ & & & \ddots & & \\ 0 & 0 & 0 & & \lambda_i & 1 \\ 0 & 0 & 0 & & 0 & \lambda_i \end{pmatrix}$$

のことである. A の Jordan 標準形 J は行列の直和

$$J = \bigoplus_{i=1}^s \bigoplus_{j=1}^{m_i} J(\lambda_i, k_j)$$

で表される. A の Jordan 標準形に現れる Jordan 細胞については以下が成り立つ.

- (1) 固有値 λ_i の Jordan 細胞の個数は $\dim W(\lambda_i)$ である.
- (2) 固有値 λ_i の Jordan 細胞のうちの最大のサイズは $\dim \tilde{W}(\lambda_i)$ である.
- (3) 固有値 λ_i に属する Jordan 細胞のサイズの和は固有値 λ_i の重複度に等しい.
- (4) $AP = PJ(\lambda_i, k_j)$ をみたす k_j 次正則行列 $P = [u_1 \ u_2 \ \dots \ u_{k_j}]$ に対して,

$$(A - \lambda_i E)u_1 = 0, \quad (A - \lambda_i E)u_i = u_{i-1} \quad (i = 2, 3, \dots, k_j)$$

が成り立つ.

- (5) j 次 Jordan 細胞の個数 $q(j)$ ($j = 1, 2, \dots, r(\lambda_i)$) について次式が成り立つ.

$$q(j) = \text{rank} (A - \lambda_i E)^{j+1} - 2\text{rank} (A - \lambda_i E)^j + \text{rank} (A - \lambda_i E)^{j-1}$$

参考文献

- [1] 線型代数学, 佐武一郎, 裳華房
- [2] 線型代数入門, 松坂和夫, 岩波書店
- [3] 重点解説 ジョルダン標準形, 西山亨, サイエンス社